

(第一回) 法華經とお題目

今回から「寺報」に法華經について述べさせていただきます。“解りやすく正確に”をモットーとする所存ですが、初回は日蓮宗の核心にも立ち入るために専門用語も出てまいります、しばしお付き合いをおねがいたします。

法華經は正確には「妙法蓮華經」といい日蓮宗の依って立つお經です。

【お釈迦様の数多くのお經の中で、なぜ「法華經」なのでしょう】

インドで説かれた多くの經は、中国仏教の第一人者と称される天台大師智顛(538-597)により成立順序および内容をもとにその発展段階が整理(教相判釈)されました。そして法華經こそお釈迦さまが布教活動の最後の8年間で、ご自身の本心を明らかにし「**全ての生きとし生ける者が仏と成り得る性質を持つ(一切衆生悉皆成仏)**」と初めて説いた**最高の經典**であることを明らかにしたのです。さらに智顛はその述作の『摩訶止観』にて正しい止観(禪定・瞑想修行)の方法を説き、「人はその一瞬の念(おもい)の中に、仏の世界から地獄の世界まで三千の世界つまり全ての宇宙・生命を具えている。自身の心を観ずること(観法)により自らの生命が宇宙の大いなる生命と一体となったことを体感体得したときを成仏とする」という**一念三千(理の一念三千)**の法門を立てたのでした。(『お題目がわかる本ーわかりやすい事の一念三千』瀬野泰光口述 p93-94 日蓮宗新聞出版部より要旨)

【日蓮聖人は法華經の相承者】

法華經はやがて日本にもたらされました。日蓮聖人(1222-1282)はその信仰を深め、法華經は釈尊が末法の衆生救済のため**(末法為正)**に説いた、苦しみの多い娑婆世界の衆生を即身成仏に導くこと**(娑婆即寂光)**を目的とする尊い教えであるとし、さらに自身を釈尊一天台大師一伝教大師(最澄)に継ぐ末法における法華經の継承者**(三国四師)**であるとの自覚を持ちました。また、天台大師の一念三千の教えは像法時(釈尊の滅後、正しい教えに似た教えが実践されている時期)における衆生の救済方法としては可能ではあるものの、それから時代の遙かに下った日蓮聖人の末法時(正法の滅する時期)の世では、煩惱にまみれた衆生が修行と悟りを得ることは不可能であるとして、あらたに法華經の信仰にもとづいた**唱題(お題目)中心の信仰の実践(事の一念三千)**による**成仏得道**を説いたのです。

【なぜ「お題目＝南無妙法蓮華經」を唱えることで成仏できるのでしょうか】

法華經は先ほどのべましたように「全ての衆生が覺りを得て成仏してほしい」との思い(本願)から、釈尊が自らの本心を全て明かしご自身の生命すべてを注ぎ込んだ「**永遠の真理のおしえ**」です。つまり、「妙法蓮華經」の五字は**釈尊そのもの**といえましょう。また、「南無」とは「すべて帰依します、一体となります」ということを意味します。つまり「**南無妙法蓮華經**」と七字を唱えること(唱題)は、お釈迦様を自分の心の中にお迎えしてお釈迦様と一体になることなのです。ここにお題目を唱える意義があるのです。これなら末法の世の私たちにも可能です。これこそ日蓮聖人が私たちに与えてくださった**末法の世における成仏得道の実践修行、即身成仏のおしえ**なのです。(詳細は次号に続く)

日蓮宗専任布教師、身延山久遠寺大本願人 山本顛伸